脱出

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
脱出

【Ｎコード】
Ｎ４５４４Ｆ

【作者名】
神童サーガ

【あらすじ】
のんびりした女の子は、とある屋敷に閉じ込められる。そこで会った友人達と脱出する。恋愛もあります。

（前書き）

微妙な終わり方ですが、理由があります。後書きに載せます。

「ハァハァ・・・疲れた」

今、逃げてます。何にって？オバケからです！！
なんで、こんなことになったのかというと・・・。

「チラシ？“君は、この恐怖から脱出出来るか！？出来た者には何でも願いを叶えます”・・・・ふ～ん」

数日前に変なチラシが来た。本来なら捨てれば良いのだろうが、それが出来なかった。
理由は、１７歳なのに恋人がいないから。だから、出来たら良いなと安易な考えで参加したんだ。それが全ての始まりだった・・・。

でも現実は、化け物屋鋪に閉じ込められ、背後からは、正体不明の生き物かどうか判断し辛いものが追って来る。

『百六十人が、この化け物屋敷に閉じ込めらてるよぉ！！自分だけ

出ても良いし、仲間同士集まっても良いよん！！ただし、出れるならね・・・』

この放送は、着いてから数分後に流れたものだ。楽観的で嫌に人を苦しめる声だった。

初めて聞いた時は、人間らしくない、感情が無い声に鳥肌が立った。

憎しみで一杯の最悪な声だった。

『みんなはバラバラの場所にいるから・・・・・・でも、見つけることは・・・・ふふっ』

最初は、言葉の意味が分からなかった。でも、今は分る。化け物がいるからだ。

「ハァハァ・・・もう無理かも・・・・・・！？」

手を壁に付きながら歩いてると、角になった。角に気付かなかったため、スルッと滑って倒れこんだ。

だけど、不思議なことに痛みは無かった。

「え？」

「・・・大丈夫？」

変声期前の幼い声が私の身体を包む。
冷えてる空間に温かい感触。

「・・・他にもいたんだ」

「あ、うん」

やっと、助けてくれた人の顔を見ることが出来た。
見た目は、細身なのに抱き締めた身体は、意外にも筋肉質だった。
髪は色素の薄い茶色だった。

「ありがとう・・・」

「・・・ん」

妙な静けさが辺りを包む。
どうやら彼は、無口なんだ。

「私は、真綾・・・」

「・・・俺は空陽」

今さらながら、私の紹介をします。
私は、真綾(まあや)で、容姿はおまかせします。
性格は、のんびりしてると言われます。
そして、この美少年は空陽(すばる)と言うらしい。

「一緒に出よう？」

「・・・ん。一人はキツい」

良かった。誰かがいてくれると嬉しいから。

「そっちは？」

「・・・何にも無い行き止まり」

そっか・・・じゃあ、もう一つ道があるし・・・ちなみにY路地みたくなってる。
まだ行ってない場所に向かって歩く。
この沈黙が辛くて、話し掛けた。

「空陽くんの願いってなに？」

「・・・ん～。無い」

私は、大きな声で聞き返してた。

「特に考えず参加・・・」

この美少年が分らなくなって来た。

「真綾さんは？」

「私は・・・い、言えない」

恥ずかしいよ！！恋人探しのために参加なんて！！

「・・・・しっ」

人差し指を口許に当て言った。その姿が似合っていてドキドキした。

「声が・・・・する？」

「・・・・二人」

私を庇いながら言う空陽くんに、白馬の王子様を重ねた。

声のする方から、騒がしい声とクールな声がした。

「だれ！？」

私は、味方だと思い声を上げた。
声は静まった。だけど、数秒後に大きな明るい声がした。

「おーい！！味方～？」

「バカ！敵だったらどうするんです？」

同じくらいの女の子の声と敬語の男の子の声がした。
辺りは暗いが、そんな中でも暗い影から現れたのは、高身長の少年とショートヘアーの少女だった。

「初めまして！！私は、志真！！」

「・・・僕は坂本」

何故か名字の二人に問い掛けても答えてくれなかった。

「私は、真綾」

「・・・俺は空陽」

坂本(さかもと)くんは、眼鏡を掛けて生徒会長っぽかった。でも、裏がありそう。

志真(しま)ちゃんは、明るい子で美少女だった。頭が弱そうだけど。

「どこかへ行くの！？」

「私達が来た道と志真ちゃん達が来た道以外ね」

志真ちゃんの質問に答えた。

坂本くんは、何かを考えてる。

「案外、出口は近いかもしれません」

「どうして？」

「考えてみなさい、僕達が来てから時間は経っていない。だけど、ここに入ってからの時間は長い」

坂本くんの言う通りだ。私達は、自分の意思で屋敷の個室に集まった。

でも、その個室には誰もいなかった。ボーッとしてたら、意識を失った。そして、気がついたらココにいた。

あの空白の時間の記憶が無い。

「たぶん、ここにいる皆も同じでしょう」

「また、私の心読んだ！！」

あれ？読心術って・・・。
でも、私のが読まれたんじゃ・・・・。
志真ちゃんと同じこと考えてたのかな？

「・・・それより後ろ」

今まで黙ってた空陽くんが言った。
私達は、えっ！？と後ろを見ると、化け物がブリッジしながらこちらに来る。
しかも、速いから恐い。

「いやーーーっ！！」

志真ちゃんの叫び声と同時に走り出した私達。

「・・・あっ」

「空陽くん！！」

足が縺れた（もつれた）ようで、転んだ空陽くん。
化け物は、止まる様子は無く座り込んでる空陽くんに近付く。

「ざけんじゃねーよ！！空陽に近付くな！！」

化け物に近付き、化け物の顔にハイキックを喰らわした。
化け物は、顔を押さえながら座り込む。
その化け物に踵落としをした。

「気絶した・・？」

女の子の声がボソッと聞こえた。

「真綾・・・さん？」

私は、空陽くんを抱き上げて走り出した。
背後から、追って来る二つの足音を確認しながら・・・。

「ハァハァ・・・」

「真綾ちゃんって凄いね」

「火事場の馬鹿力か・・・」

そうです。私は、別に強く無いのに空陽くんが危ないって分ったら、身体が自然に動いてた。

「あの、降ろして？」

未だに抱き上げた（お姫様抱っこ）ままだから、動揺してる空陽くん。

ゴメンと降ろしてあげた。

「でも、あのキモいの二度と復活しないで欲しいですね」

「怖いよ・・・」

「ん？誰がですか？この口が言ったのですか？」

志真ちゃんの口をギュッと握ってる。いひゃい、と泣いてる。

私は、構ったら何かありそうだから止めない。

「・・・真綾」

「なに？・・・・・・え」

よ、呼び捨て!?・・・・・・・そういえば私、空陽くんを呼び捨てしてたような。

「・・・呼び捨てで良い」

「うん」

なんか、良い雰囲気で・・・。幸せだなぁって思う。こんな場所でだけど。

「なーにピンクのオーラを出してんの?」

私と空陽は、真っ赤になった。

「あ、あのさ・・・」

私が言った言葉に、ん?と皆は私を見る。

「ここから出ても友達でいてくれる?」

「なーんだそんなこと?」

は？そんなこと！？私は必死で考えてたのに・・・。

「真綾！！」

「もう友達ですよ」

「・・・うん」

・・・・あ。そうなんだ。
うわっ。泣きそう・・・。

「泣かないで真綾・・・」

「志真・・・」

なんだ泣いてたんだ私。
頬が温かいと思ってたけど気付かなかった。

「どれだけ鈍感なんですか」

「心読むな！！」

なんか、もう恥ずかしいよ。

「真綾の心読むなんて許さない！！」

「どう許さないんです？あ〝あ？」

志真の頭を強く握ってる坂本くん。
ギシギシ鳴ってるよ・・・。流石に助けなきゃ。

「って、あれ？空陽は？」

「先に行った？」

私達は、急いで走った。あぁ・・・・置いてかないで！！
すっかり涙は乾いてました。

「空陽？」

「・・・なんか、変」

追い付いたが、空陽は扉の前で止まってる。

「風がありますね。出入り口でしょうか」

坂本くんは言った。微かに風がある。

「ぶつかれ・・・」

「うにゃっ！！」

志真を投げ飛ばした坂本くん。
変な声を出したよ。良いの？

「良いんです。貴女もやりますか？」

っいいえ！！遠慮させて頂きます！！
何度この美少年は心を読めば気が済むんだろう？

「・・・開いたよ」

ボソッと言った空陽の声に、扉を見る私達。

暗闇から光が洩れてるせいか、急に瞳孔が活発になったから痛かった。
そして、慣れた頃に外に出た。

「・・・屋敷の入口？」

私達が始めに来た屋敷の入口にいた。
周りを見ると、離れた所に建物があった。

「うにゃ～」

「大丈夫？志真」

「真綾は優しいにょ～」

頭を強く打ってしまったようで、言葉遣いが変わってる。
私は、優しく頭を撫でてあげた。

「なぁ、空陽・・・」

「・・・ん？」

空陽と坂本くんが話をしてるみたいだけど、私達には聞こえなかった。

「僕が、このゲームに参加した理由は・・・」

「・・・志真さんと付き合う？」

「なっ！！なんで分ったんですか？」

顔の様子しか分らないけど、坂本くんは焦ってる様子だった。

「・・・好きな子ほど苛めたいってタイプだよね？」

「あぁ、願いよりも覚悟だったんです。アイツとは幼馴染みで、でも告白なんて出来ないですから・・・」

「・・・じゃあ、一緒にしよ？」

赤い顔で話してる坂本くんに、何かを言ってる空陽。

まさか、この時に話してることがアレだったなんて思わなかった。

「・・・俺、好きな人いるから」

「わ、分った」

話が終わった様子で、こちらに来る二人。

「とりあえず、あの部屋に行ってみましょう」

「そうだね」

みんなで、離れにある小屋に向かった。

「凄いですよ!!オレが作った世界を出るなんて!!」

入った途端に拍手をしながら、高級イスを回して、こちらを見る。
あの放送の声だった。やっぱり鳥肌が立つ。

「なんのつもりでこんなことを!?」

「・・・無駄に生きてる君達に試練を与えたんだよ。褒めてくれても構わないよ」

珍しく、キレてる志真に答えたのは、ふざけた内容だった。

「無駄に？」

「普通さぁ・・・何でも願いを叶えるって言ったからって来ないよね。飢えてる証拠だよ。ツマんない人生に・・・」

正直、答える自信は無かった。
いつも通りの日常に飽きてた自分がいたから・・・。

「言い返せないってことはそうだよね」

ニンマリと笑う男にイライラする私。

「・・・確かに参加した俺達はバカで憐れなのかもしれない」

「でも！！それをアンタに言われる筋合いは無い！！」

空陽の言葉に続けと叫んだ志真。

「狂言者ですね。本当に飢えてるのはアンタなんですよ」

「無駄にお金掛けて、騙して集めて・・・誰かが傷付けばどうする気だったのよ！！」

坂本くんと私の言葉に何も言わない男。
だけど、突然笑い出した。

「なんでガキ達に言われなきゃいけないんだよ・・・了承して来たのはテメーらだろうが」

懐から、取り出したのは銃だった。
偽物には見えず、重そうだった。

「まぁ、テメーらが死ねば終わりだけど・・・」

銃弾の音が二発聞こえた。
でも、やはり痛みは無かった。

「え・・・」

「うそ・・・」

目の前が、赤と白しか見えなかった。
志真も同じ現状だったのか、いつもの元気は無い。

「空陽!!」

私の声と志真が坂本くんの名前を呼ぶ声が重なった。
ドサッと倒れた身体。信じたくない。
右腕を撃たれたのか、ペンキのような血がシャツに染み込んでる。
息は熱く呼吸をするのも辛そうだ。

「ゴメン・・・真綾・・・俺・・・・真綾が・・・・好きだ」

何を言ってるの？こんな時に・・・。
目の前が見えなくなった。目の半分に水が浮かぶ。
涙なんだろうな。さっきと違うほうの。
弱々しく私の頬を触る空陽の手が冷たい。
この時、私の脈拍はドクンと波打った。
私は、この後の出来事は覚えて無かった。
気がついた時には、男は倒れて手錠を掛けられていた。
空陽と坂本くんは、救急車に運ばれていた・・・。

私と志真は、タクシーで病院に向かった。
その時に、失ってた部分の話を聞いた。
志真には、速過ぎて目では追えなかったみたい。ドサッと音がした時には、男はやられてたらしい。
救急車とかを呼んだのは、助かった他の人らしい。
しかも、あの屋敷にいたのは数名だったらしい。

「あの・・・嘘つきめ」

「うん・・・誰も怪我が無くて良かったね」

笑顔で言った志真だったが、目は笑ってなかった。
だって、大事な人が傷付いたんだから・・・。

「あの男ね・・・精神異常者だったんだって・・・自分は神だ・・・
この世界を救うのは自分だって・・・」

「そんな言葉で片付けられてもね」

私の言葉に頷いた志真。
失った物は二度とは戻らないんだから。

いつの間にか病院に着いた。
私達は降りて、病室を聞いて行った。
場所は、それぞれ違うみたいだけど、隣りらしい。
私は、ソッと部屋に入った。
色んな機械に縛られてる空陽。
私は、下唇を噛み締め呆然と立ってるしか出来なかった。

「ごめんね・・・守ってもらって・・・・・返事・・・こんな時だけ
ど返すよ・・・・・はぁ・・・・・・空陽・・・私も好きだよ・・
・大好き・・・・愛してる」

深呼吸してから告白をした。
聞こえてるかな？私の声・・・。
いつか、デートしようね。

微かに動いた手に、想いを乗せて・・・。

（後書き）

別サイドを創ろうと考えてます。志真や坂本サイドも・・・名前を出すと思います。その後のストーリーも書きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4544f/

脱出

2010年10月28日03時46分発行